

「2・8独立宣言、3・1独立運動と明治学院」資料集

明治学院中学校・明治学院東村山高等学校 社会科教諭

明治学院大学キリスト教研究所 協力研究員

佐藤 飛文^{たかふみ}

はじめに

明治学院中学校2年生の社会科校外授業で、2006年度から新たに加わった訪問先がある。千代田区猿楽町にある在日本韓国 YMCA である。ここを訪問することになった理由は、在日本韓国 YMCA が朝鮮人東京留学生により2・8独立宣言が発表された場所であり、明治学院の卒業生である李光洙がその宣言文を起草したからである。

今から百年前の1919年に発表された2・8独立宣言は、3・1独立運動の導火線となった。この独立運動に明治学院の関係者が少なからず参加したことはすでに『明治学院歴史資料館資料集第8集』（2011年）および『明治学院150年史』（2013年）にも書いたのであるが、2・8独立宣言の発表と3・1独立運動の開始から100年をおぼえて、関係する資料を新たに蒐集して翻訳し、解説を加えた。

2022年4月から高校で実施される新学習指導要領により、高校に「歴史総合」という必修科目が設立されることとなった。「歴史総合」は様々な資料を用いながら近現代史を学ぶ、世界史と日本史を統合させた科目である。この資料集が明治学院大学の「明治学院研究」の講義をはじめ、明治学院東村山高等学校および明治学院高等学校の「歴史総合」の授業でも用いられることを期待している。

資料1：李光洙が起草した「2・8独立宣言」

資料2：李光洙の自伝『私の告白』より（佐藤飛文 訳）

資料3：白南薫の自伝『私の一生』より（佐藤飛文 訳）

資料4：金東仁の自伝『文壇十五年裏面史』より（佐藤飛文 訳）

資料5：金東仁の自伝『文壇三十年の足跡』より（佐藤飛文 訳）

資料6：朱耀翰の自伝『20世紀生まれ』より

資料7：文一平が起草した「哀願書」

<資料1> 李光洙が起草した「2・8独立宣言」

独立宣言書

全朝鮮青年独立団はわが二千万の民族を代表し、正義と自由の勝利を得た世界万国の前にわが独立を期成せんことを宣言する。わが民族は四千三百年の長い歴史を有し、世界最古の民族の一つである。時には中国の正朔を奉じたことはあったが、これは両国皇室の形式的な外交関係に過ぎなかった。朝鮮は常にわが民族の朝鮮であり、いまだかつて一度として統一国家であることを失い、異民族の実質的支配を受けたことはなかった。

日本は朝鮮が日本と唇齒の関係にあることを自覚していると称して、一八九五年日清戦争の結果率先して韓国の独立を承認した。イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシアなどの諸国もまたみな独立を承認しただけでなく、これを保全することを約束した。韓国もまたその恩義に感じ鋭意諸般の改革をおこない、国力の充実を図ったのである。

当時ロシアの勢力が南下し東洋の平和と韓国の安寧を脅かしたので、日本は韓国と攻守同盟を結び、日露戦争をはじめたが、東洋の平和と韓国の独立はこの同盟の主旨であった。ここにおいて韓国はいよいよその好意に感じ、陸海軍の作戦上の援助はできなかったが、わが主権の威厳までも犠牲にしておよそ可能な限りの義務をつくし、東洋の平和と韓国独立の二大目的を追求した。

しかしその戦争が終結するにおよんで、当時のアメリカ大統領ルーズベルトの仲裁によって講和会議が開かれたが、日本は同盟国である韓国の参加を許さず、露日両国の代表は日本の韓国に対する宗主権を任意に議定した。日本はその優越した兵力によって、韓国の独立を保全するという旧約に違反し、韓国皇帝および政府を脅かし、韓国の国力充実によって独立が得られる時期までという条件をおしつけて欺き、韓国の外交権を奪って、日本の保護国となし、韓国をして世界列国にたいし直接交渉する道を断たしめた。さらに相当の時期までという条件で司法・警察権を奪い、徴兵令実施までという条件で軍隊を解散し、民間の武器を押収して日本の軍隊と憲兵警察を各地に配置した。甚だしきは皇宮の警備までも日本人の警察を使用するに至った。このようにして遂に韓国を無抵抗なものにしながら、わが明哲な光武皇帝を放逐し、皇太子を擁立して利用し、日本の走狗をもっていわゆる内閣を組織し、ついに秘密と武力とをもって合併条約を締結した。ここにわが民族は建国以来半万年にして自己を指導し援助すると約束した日本軍閥の野心的政策の犠牲となった。実に日本の韓国にたいする行為は詐欺、暴力から出たものにして、このような詐欺による大きな成功は、まことに世界興亡史上特筆すべき人類の大恥辱といわねばならない。

かの保護条約を締結するとき皇帝と賊臣を除く数人の大臣はあらゆる反抗手段をつくし、その発表の後もわが全国民はみな素手でもって可能な限り反抗した。司法・警察権が奪われ軍隊が解

散されたときもまた同じく反抗した。こうして合併の際には、手中に寸鉄の武器をもたず、可能な限りの反抗運動を試みたが、精鋭な日本の武器により犠牲となったものは数知れない。以後十年間、独立を回復するための運動で生命を犠牲にしたもの、また数十万に達した。かの惨酷な憲兵政治のもとで、手足と口舌の自由を奪われながらも、独立運動は間断なくつづけられた。これらによってみても、韓日合併は朝鮮民族の意思ではないことを知らねばならない。このようにして、わが民族は日本軍国主義の野心家の詐欺、暴力のもとに民族の意思に反する運命におかれた。それ故に正義、人道をもって世界を改造するこの時にあたり、その匡正を求むることは当然の権利であり、また世界改造の主人公であるアメリカ、イギリスは保護と合併にたいし率先して承認をしたという理由によって、今日その旧悪を贖う義務がある。

また合併以来の日本の統治政策をみると、かの合併当時の宣言に反し、わが民族の幸福と利益を無視し、征服者が被征服者にたいするような古代の非人道的な政策を襲用し、わが民族にたいし参政権、集会・結社の自由、言論・出版の自由などを一切許さず、甚だしきは信教の自由、企業の自由に至るまでも拘束している。行政、司法、警察などの諸機関で朝鮮民族の私権さえも侵害しないものはない。公的にも私的にもわが民族と日本人との間に優劣の差を設け、わが民族には劣等の教育を施し、永くわが民族を日本人の使役者にしようとしている。歴史を書き改め、わが民族の神聖な歴史的、民族的伝統と威厳を破壊し、さらに凌辱を加えている。少数の官吏を除くほかは、政府の諸機関、交通、通信、兵備などの諸機関の全部あるいは大部分には日本人を使用し、わが民族に永遠に国家生活の智能と経験を得る機会を与えないようにしている。わが民族は、このような武断専制の不正、不平等の政治のもとでは、決してその生存と発展を享受することができない。それだけではない。人口過剰の朝鮮に無制限の移民を奨励し、土着のわが民族が海外に流離するのやむなきにいたらしめた。また政府の各機関はもちろん私設の諸機関にまでもことごとく日本人を使用し、一方でわが国民に職業を失わしめ、また他方ではわが国の富源を日本に流出せしめた。また商工業においても日本人に対してのみ特殊な便益を与え、わが民族にはその産業発展の機会を失わせている。このようにあらゆる方面でわが民族と日本人の間の諸般の利害は互いに相反し、その害を受くるものはわが民族である。故にわが民族は生存の権利のために独立を主張するのである。

最後に東洋平和の見地からみても、かの最大の脅威であったロシアはすでにその軍事的野心を放棄し、正義と自由にもとづき新国家の建設に従事している。中華民国もまた同様である。さらに今後国際連盟が実現すれば、再び軍国主義的侵略を敢行する強国はなくなるであろう。とすれば韓国併合の最大の理由はすでに消滅している。これより、もし朝鮮民族が無数の革命の乱をおこすとすれば、日本に合併された韓国は却って東洋平和を乱す禍根となるであろう。わが民族はただ一つの正当な方法によってわが民族の自由を追求する。もしこれが成功しなければ、わが民族は生存の権利のために自由な行動をとり、最後の一人に至るまで必ずや自由のために熱血をそ

そぐであらう。これがどうして東洋平和の禍根とならないであらうか。わが民族は一兵ももっていない。わが民族は兵力をもって日本に抵抗する実力はない。しかしながら、日本がもしわが民族の正当な要求に応じなければ、わが民族は日本にたいし永遠の血戦を宣布せざるを得ない。

わが民族は高度の文化をもってからすでに久しい。そしてまた半万年にわたる国家生活の経験をもっている。たとえ多年の専制政治の害毒と境遇の不幸がわが民族の今日を招いたものであるにせよ、今日より正義と自由にもとづく民主主義的先進国の範に従い、新国家を建設するならば、わが建国以来の文化と正義と平和を愛好するわが民族は必ずや世界の平和と人類の文化にたいし貢献するであらう。ここにわが民族は日本および世界各国にたいして自決の機会を与えることを要求する。もしその要求が入れられなければ、わが民族はその生存のために自由な行動をとり、わが民族の独立を期成せんことをここに宣言する。

一九一九年二月八日

朝鮮青年独立団代表

崔八鏞 尹昌錫 金度演 李琮根 李光洙 宋繼白

金喆寿 崔謹愚 白寬洙 金尚徳 徐 椿

決 議 文

- 一、韓日合併はわが民族の意思によるものでなく、わが民族の生存と発展を脅かし、また東洋の平和を乱す原因となっている。それ故に本団は、わが民族の独立を主張する。
- 二、本団は、日本の議会と政府にたいし朝鮮民族大会を召集し、その大会の決議をもってわが民族の運命を決定する機会を与えられんことを要求する。
- 三、本団は、万国平和会議における民族自決主義をわが民族にも適用せんことを請求する。またその目的を達するために、日本に駐在する各国大使、公使にたいし、本団の意思を各自の政府に伝達することを要求する。同時に委員二人を万国平和会議に派遣し、わが民族全体の派遣委員と一致した行動をとる。
- 四、以上の諸項の要求が不幸にも失敗すれば、わが民族はただ日本にたいし永遠の血戦をなすのみである。これによって生ずる惨禍についてわが民族はその責任を負わない。

<資料1解説>

第一次世界大戦中にアメリカ大統領ウィルソンが提唱した十四か条の平和原則の中の「民族自決の原則」は、植民地の人々に大きな希望を与え、独立運動が盛り上がる契機となった。

1918年12月、朝鮮留学生学友会が神田で開いた忘年会で独立運動の提案が出された。翌1919年1月、朝鮮青年独立団が組織され、独立宣言書と決議文、民族大会召集請願書が作成された。この独立宣言書を起草したのが李光洙であった。朝鮮語で書かれた独立宣言書は李光洙自身の手で日本語訳と英訳がなされた。李光洙の自伝（資料2）によると、彼は独立宣言書を英訳する際、母校である明治学院を訪れ、かつての恩師であるランディスに添削を依頼したという。李光洙はこれらの文章を持って上海へ亡命し、上海から世界各国に独立宣言文を打電した。

1919年2月8日、日本語と英語に訳された独立宣言文と決議文、民族大会召集請願書を日本の貴族院、衆議院の議員たち、政府要人、各国駐日大使、内外言論機関宛てに郵送した。この日の午後2時から、学友会総会が東京市神田区西小川町（現在の千代田区西神田）2丁目5番地にある在日本朝鮮基督教青年会で開催された。講堂には約六百人の朝鮮人留学生であふれかえったという。総会は独立宣言大会にきりかわり、「2・8独立宣言書」が発表された。警察官たちが乱入して会は強制的に解散させられ、指導者たちは検束された。また、朝鮮に派遣された宋継白は、崔麟や玄相允、崔南善（3・1独立宣言の起草者）と会い、それが3・1独立運動へとつながった。

在日本韓国 YMCA には「朝鮮独立宣言一九一九 二・八記念碑」が建てられ、2008年には「2・8独立宣言記念資料室」が開室された。



在日本韓国 YMCA にある記念碑

<資料2> 李光洙の自伝『私の告白』より

己未年⁽¹⁾と私

戊午の年、1918年11月11日、欧州大戦の休戦条約が成立したという報せを私が新聞で読んだのは北京でだった。ウィルソンの14ヵ条が発表され、パリで平和会議が開かれることになり、中国代表の陸徵祥⁽²⁾氏がパリへ向けて北京を出発した。

このニュースは私の心を揺り動かした。私はすぐ荷物をまとめてソウルへゆき、清進洞のある旅館で中央学校に電話をかけ玄相允⁽³⁾を呼び、この機会に独立運動を起こす相談をした。私が特に玄相允にこの話をしたのは、彼が私の信頼する友人だということと、もう一つ重要な理由があったのだが、それは玄相允が崔麟⁽⁴⁾と師弟関係があり親近感を抱いたからだった。私は海外の消息をより詳しく聞くことのできる北京で得た情報を彼に伝え、彼が崔麟を動かし、崔麟を通して天道教⁽⁵⁾の孫秉熙⁽⁶⁾教主を動かし、天道教を主体として運動を起こそうということだった。

私は玄相允と会うとすぐに東京へと向かいソウルを発った。私はまだ早稲田大学に在学中であったので、警察に対しても申し立てすることができたのだ。時は12月末で2学期の試験を受けることができた。

冬休みになった。私は人物を選び始めた。この人かと思う人を見つけては行って雑談し、時局に対する意見を尋ねた。そうして私が探し当てたのが崔八鏞だった（彼は咸鏡南道洪原郡の出身で、すでに故人だ）。彼は早稲田の政治科にいて、私とは一学期間一緒だったが、普段からそんなに親しいわけではなかった。気骨壮大で男らしい人物だった。ある寒い日、私は彼と一緒に労働者たちが通う立ち飲み屋へ入り、安酒と「おでん」を食べながらとりとめのない酔談をしていた。そうこうしているうちにさらに酔い、声をあげて騒ぎ、さらに語りあっていくうちに、私たちの思いは完全に一致していることがわかった。そこで私は自分が起草した独立宣言書と日本帝国議会に送る文章とそれを印刷する費用300円を崔八鏞に渡した。その金は金錫璜⁽⁷⁾から出たものだった。金錫璜は黄海道鳳山の出身で私を頼って東京に勉強をしに来ていたのだった。

宣言書を日本の絹布に書き写し、制服の裏地に縫い付けて宋継白⁽⁸⁾を本国に送った（彼もすでに亡くなった人物だ）。東京では2月8日を期して留学生たちが集まり独立宣言をするので、ソウルでもそれに応えてくれと伝えたのだった。内外で一緒に行動を起こすことで力が増すからだった。私は宋継白にソウルに行ったら中央学校の玄相允を訪ねるようにさせた。宋継白はすぐに出発した。彼は平安南道の安州出身で、当時早稲田の法科にいたのだったが、落ち着いていて無口な人だった。この人も東京宣言書署名人の中の一人だが、彼の他に、白寛洙・金度演・徐椿・金喆寿・崔謹愚・金尚徳らは崔八鏞氏が連絡した。

宣言書を英語に翻訳したのだが、私はこれを校正してくれる人を見つけることが出来なくて案じていたのだが、宣教師である尹山温（ジョージ・シャノン・マッキューン）⁽⁹⁾博士がアメリ

カから朝鮮へ帰る途中に私の下宿を訪ねてきた。彼は宣川にいて私が定州の五山学校にいたときに親しくなり、彼がわが民族を深く愛していることは、新民会事件（寺内総督暗殺陰謀事件）で彼がおこなったことと、のちに日本官憲より朝鮮からの退去命令を受けたことを見てもわかることだった。

私は彼を信じていたので、彼に東京の留学生たちの計画を話し、宣言書の英文を校正してくれないかと頼んだのだが、マッキューン博士は目を閉じ少し考えたあとに、「李先生、私はこの文章を読まない方がよさそうです。私は今朝鮮へ帰る途上ですから。でもよい人物がいます。ランディス⁽¹⁰⁾博士です。彼は近いうちにアメリカに帰ります。私でしたら李先生にランディス博士を紹介することができます。」と言って自分の名刺を取り出した。話を聞いてみると彼のはからいは聡明だった。

ランディス博士は私の中学校時代の恩師だったので、紹介は必要ありませんと話した。

私はその日の晩にランディス博士のいる芝区白金の明治学院を訪ねた。私が明治学院中学部を卒業してから9年ぶりであった。腹が出ており、落ちくぼんだ丸い目の年老いた博士は、喜んで私の要請に応じてくれた。そのころにはすでに70歳になっていた彼は、まだご存命なら百歳になっているはずだ。

「愛国運動には成功も失敗もないものですよ」

私は彼からそのような言葉を聞いた。

すべての準備がととのい、今は2月8日が来ることをだけ待っていたある日、崔八鏞が私の下宿にきて、私に上海に行ってほしいと勧めた。これは自分個人の意見ではなく同志一同の意志であると言って、現金をいくらか（二百数十円だったか、はっきりしていない）私に渡した。彼の言葉によると、我々が東京で独立宣言をしてすぐ捕まってしまうたら、我々のことを世に知らせることができなくなってしまうので、君が上海に行って、「韓国を日本が統治することは二千万大韓民族の意志ではない」と言って東京の留学生達が独立を宣言したということを広く世界に宣伝してくれということだった。そこで私はあくる日の朝6時、静岡に行く汽車に乗って東京を出た。下宿の主人に対しては「二、三日間、温かい沼津地方に行く」という口実にした。このようにして私の本や衣類などそのまま置いて体一つで出たのだった。私は静岡で降り、さらに名古屋行きに乗り、そこでさらに神戸行きの汽車に乗った。警察の目を避けながらだった。

神戸から上海へ行く船の切符は無事に買うことが出来たが、船に乗るときに警察の目に留まり、私は北京の「順天時報」の記者になるので行くのだと話したが、警察は手帳に書き記すだけの聴取で済んだ。

私が上海に到着したのは、己未年1月末だった。私は上海で一体全体誰を探せばよいかわからなかった。4年前に上海にいた人たちの中で誰が今も残っているのかもわからず、またどこへ行けば彼らと会うことができるのかもわからなかった。まさに南大門入納⁽¹¹⁾ではなく上海入納で

来たのだった。

ところが、幸いにも埠頭で張徳秀⁽¹²⁾と会った。

「どうしてここに？」

「やあ、春園⁽¹³⁾じゃないか。どうしてここに？」

と言って私たちは驚きあった。私はこれこれこういうわけで日本から来たんだと話し、彼は運動を起こすために東京に行くのだと言って、「お金、余ってないか、君」と尋ねた。私は財布を出して二十円を渡した。彼はかろうじて船の切符だけを持って出発するとのことだった。

張徳秀を見送りに来ていた人がいて、それが趙東祐⁽¹⁴⁾だった。張徳秀は私と趙東祐に見送られて船に入っていった。

趙東祐は私を法祖界にある奥まった、汚い中国の家へ連れて行った。裏門をくぐると汚い中国の老婆が出てきた。主人のかみさんだった。

趙東祐の部屋は二階だった。部屋の中には粗末なベッドが2つしかなかった。その1つに張徳秀が寝泊まりしていたようだった。趙東祐は私の財布に残っている小銭で焼酎を買って、その晩は酔っぱらうまで飲み、部屋の床に小便をもらして、階下にも漏れてしまい、主人のおかみさんが驚いて上がってきて文句をつけた。こんなふうに、趙東祐は気さくな人士だった。

上海にはその当時金澈・韓松溪らがいて、彼らは新韓青年党の党員だった。金澈が本国に帰り天道教から金3万円を得て来て、数日前に金奎植を民族代表としてパリに送ると同時に、独立運動をはじめめる目的で呂運亨をソ連へ、鮮干赫を本国へ、そして張徳秀を日本へ送ったという話を聞いた。そして彼らは私に上海で新聞を出す仕事を任せたいと言った。新聞を出すために趙東祐が国文（ハングル）活字の母型を作る作業をしているとのことだった。

また、上海には干蒼・申錫雨⁽¹⁵⁾がいた。彼と私は顔なじみだったが、他の人たちはみな初対面だった。ところが申錫雨は新韓自由党とは仲間ではないようで、彼は中国人たちと交際しているようだった。私は彼に連れられ何名かの中国人と会ったのだが、その中には満州王族で学者でもある徳林と会ったことは忘れられない。徳林は「丙子年の春に清の太宗と朝鮮国が衝突した⁽¹⁶⁾のは永遠の遺恨だ」と言った。「本来同じ血と文化を持つ朝鮮と満州の両民族がその時に互いに争う代わりに互いに親しくしていれば、わが民族の歴史のみならずアジアの歴史の方向は変わっていたのだ」と嘆いていたことは、私にとって印象深いことだった。

2月8日になるのを待って私は東京宣言とそれに関する記事を書いて英字新聞「チャイナプレス」と「ノースチャイナ・デイリー・ニュース」へ行った。彼らは私の話を聞いて驚きの色を見せ、半信半疑な様子だった。

「君たちは日本を追い払って独立する力があるのか？」とノースチャイナ・デイリー・ニュースの編集員が私に尋ねた。私は「ある！」と力をこめて返答した。「どうやって？」と聞くので私は、「遠からず近いうちにあなたがたの目にお見せするつもりです」と偉ぶった。

私は自分が持ち込んだ記事が出たと思い、次の日に2つの新聞を読んでも、私が待っていた記事は出ていなかった。私は両新聞社を再訪した。彼らは「自分たちの通信員の報告が来るのを待っているのだ」と言って、「君の話だけを信じて記事を出すわけにはいかないのだ」と話した。私が上海に来た目的はこの記事を出すことだったので、私は非常にいらだった。

翌々日、デイリーニュースの評論欄に、“YOUNG KOREA’S AMBITION”という題で東京にいる韓国学生たちが独立を叫んで捕まったという記事が出た。デイリーニュースは英国の新聞だ。その次の日には米国新聞のチャイナプレスにもう少し多く私の記事が出た。これが己未独立運動に関する世界に伝えられた最初の記事だった。

2つの新聞に記事が出たので、私に任された大きな職務を全うしたつもりだったが、次に待っていたのは本国の消息だった。

2月21日頃に玄楯牧師と崔昌植が上海に来て私を訪ねた。彼らは独立宣言書1枚を持ってきて、3月3日の光武皇帝の葬儀の日を機に独立運動を起こす予定であることと、自分たちは独立運動本部の命令で代表として来たのだと話した。しかし、宣言書に署名する人物については、孫秉熙・朴泳孝⁽¹⁷⁾・李商在⁽¹⁸⁾・尹致昊らが冒頭に書かれているだけで詳しいことは知らされずにいた。

私は新韓青年団の人たちと議論して法祖界霞飛路に中国家屋を一軒手に入れて事務室に改装した。タイプライターも一つ準備して謄写版も一台購入した。本国から独立運動に関する知らせが届き次第、在外同胞へ知らせ、また平和会議と中国・英・米各新聞に宣伝をしようということだった。ソウルの独立宣言書を全て翻訳し複写しておいた。

3月3日になってもソウルの知らせはなかった。3月1日にソウルで独立運動が起きたというニュースが通信社から来て新聞に載ったのは3月5日だったと記憶している。

すでに時は来た。私たちの事務所は夜通し活動を始めた。最初にするのは、米国・ハワイなど海外にいる同胞たちの各団体とパリ平和会議に電報を打ち、上海の各新聞に記事を提供することだった。この時にちょうど呂運弘⁽¹⁹⁾が米国からヨーロッパを経由して上海に来たので、私は座って記事を書き、彼はそれを各新聞社へ持ち込んで、それまでは私が一人でやってきた仕事を二人で分担することができた。呂運弘は英語もできたので、よくまめに通い、交際もたけていて、このような仕事に適任だった。

独立宣言書に署名した人たちの名前と宣言当日の実態的な結果を知らないことは残念だったが、私は玄楯から聞いた通りに天道教首領孫秉熙、イエス教代表李商在、老いた政治家の貴族朴泳孝らが（あとで知ったところによると朴泳孝の名は噂だった）署名した独立宣言書が発表され、2千万大韓民族が独立を叫んだという長文の同文電報を打ち、パリ平和会議、アメリカ大統領ウィルソン、英国首相ロイドジョージ、フランス首相クレマンソーら列国代表に電報を打った。この日呂運弘と私は本当に威勢よく肩をそばやかしてノルウェー人の経営する無線電信局へ行った

のだ。アメリカ・ハワイ国民会に打った電報と合計して七百数十円の電報料を払って電信局から出たときは本当に別世界のような感覚だった。その時の七百円というのは私たちには途方もない大金だったのだ。

これから私たちが提供するニュースは中国新聞はもちろん英字新聞にも公式報道として歓迎され、呂運弘は毎日のように各新聞社へ通った。

<訳注>

(1) 己未年 西暦1919年

(2) 陸徵祥（1871～1949）中国の外交官、政治家。辛亥革命後には袁世凱のもとで中華民国政府初代の外交総長に就任、第一次世界大戦後のパリ講和会議では中国主席代表として参加した。

(3) 玄相允（1893～1950）。早稲田大学で学び、3・1独立宣言に参加。高麗大学の初代総長になる。

(4) 崔麟（1878～1958）天道教の幹部。普成高等普通学校の校長を務める傍らで、「新民会」において活動の続け、民族代表の1人として3・1独立宣言に署名。1905年日本留学生会の会長もつとめていた。

(5) 天道教 朝鮮、李朝末期の東学を継承した宗教。

(6) 孫秉熙（1861～1922）天道教の第3代教主。3・1独立宣言書の代表として署名。

(7) 金錫璜（1894～1950）独立運動家。2・8運動では裏方の重要な役割を果たし、上海の大韓民国臨時政府にも加わる。

(8) 宋継白（1896～1920）早稲田大学在学中に東京での2・8独立宣言の代表の一人として参加。1919年1月に留学生の代表として朝鮮に密派され、崔麟や玄相允、崔南善（3・1独立宣言の起草者）と会い、重要な役割を果たした。

(9) 尹山温（ジョージ・シャノン・マッキューン、1873～1941）アメリカ人宣教師。1905年アメリカ北長老教会宣教師として朝鮮に渡り、1909年平安北道・宣川の信聖学校校長に就任。1935年平壤の崇実専門学校校長であったとき神社参拝強要を拒否したため、翌年総督府によって国外追放された。

(10) ランディス（1857～1921）明治学院宣教師。1888年来日。

(11) 南大門入納 宛先不明の手紙。相手の住所氏名も知らずに家を訪ねる人のこと。

(12) 張徳秀（1894～1947）独立運動家、政治家。早稲田大学で学び、上海の大韓民国臨時政府にも加わり、東亜日報の社長などもつとめた。

(13) 春園 李光洙の号

(14) 趙東祐（1892～1954）独立運動家。大韓民国臨時政府の国務委員や朝鮮建国同盟の最

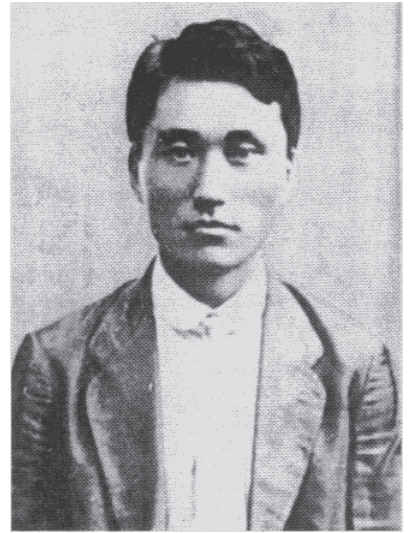
高委員などをつとめた。

- (15) 申錫雨（1895～1953）独立運動家。早稲田大学で学び、上海の大韓民国臨時政府では交通総長となった。朝鮮日報の社長や新幹会常任委員などもつとめ、独立後は中華民国駐大韓民国大使をつとめた。
- (16) 丙子の乱 1636年、清の太宗（ホンタイジ）の皇帝即位を認めないことを表明した朝鮮に対して太宗が朝鮮に遠征をし、制圧した戦い。朝鮮の仁祖は翌年1月に降伏した。
- (17) 朴泳孝（1861～1939）政治家。金玉均らと甲申政変を起こすが失敗し、日本へ亡命し築地英話学校で学ぶ。韓国併合後には侯爵（朝鮮貴族）となり、貴族院議員や東亜日報の社長などもつとめるが、3・1独立運動には参加していない。
- (18) 李商在（1850～1927）大韓帝国の政治家で開化派運動家。独立協会、万民共同会、YMCAなどで活動するが、3・1独立運動には参加していない。
- (19) 呂運弘（1891～1973）独立運動家。米国に留学しウースター大学及びプリンストン神学院で学び、李承晩や安昌浩らと独立運動に参加。大韓民国臨時政府にも加わり、仁成学校の校長などもつとめた。

<資料2解説>

李光洙（1892～1950）は朝鮮最初の本格的な近代小説を書いた作家であり、「朝鮮近代文学の祖」「韓国のトルストイ」「韓国のシェイクスピア」「韓国の夏目漱石」「韓国の島崎藤村」などと評価されている。幼名は李宝鏡。号は春園・孤舟・長白山人などがある。

1892年、平安南道定州に生まれる。1905年に渡日。1907年に大成中学から白山学舎を経て明治学院普通学部3年に編入した。この頃、友人たちと大韓少年会を結成し、回覧雑誌を発行しはじめる。1909年に日本語で書いた処女小説「愛か」が明治学院同窓会誌『白金学報』に掲載される。1910年卒業後、帰国して五山学校の教員となるが、1915年再渡日して、早稲田大学で哲学を学ぶ。1917年に朝鮮近代文学最初の長編小説「無情」を『毎日申報』に発表した。



李光洙

1919年に2・8独立宣言を起草して上海に亡命。上海では李承晩・呂運亨・金九・安昌浩・朱耀翰らと共に大韓民国臨時政府の樹立に参加し、機関紙『独立』（のちの『独立新聞』）の編集局長、社長をつとめた。1921年に帰国し、東亜日報編集局長・朝鮮日報副社長などを歴任。1937年、修養同友会事件で検挙され半年間服役。1939年、朝鮮文人協会会長に就任。1940年、香山光郎と創氏改名し皇民化政策に協力。朝鮮人学徒出陣の勧誘演説などもおこなった。解放後の1949年に反民族行為処罰法により拘束されたが、病のため半年で釈放。朝鮮戦争中に拉北され、1950年に病死したとされている。

資料2は1948年に発表された李光洙の自伝「私の告白」の一部である。2・8独立宣言を朝鮮語で起草した李光洙は、それをさらに日本語と英語に訳した。その時に彼は母校である明治学院を訪れ、かつての恩師であるランディスに添削を依頼したという。李光洙はこれらの文章を持って上海へ亡命し、上海から世界各国に独立宣言文を打電した。



この写真は1909年に明治学院で撮影されたもの。前から2列目の左から3番目がランディス、前から3列目の右から3番目が李光洙（当時、明治学院普通学部5年生）、左から2番目が文一平（当時、明治学院普通学部5年生）である。

<資料3> 白南薫の自伝『私の一生』より

第三章 青年時代 (3) 東京留学

①⑨ 民族自決の原則

ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世は野心に満ちた一代の英雄として世界制覇の雄志を抱き虎視眈々とその機会をうかがっていたが、1914年7月、セルビアのサラエボでスラブ族の一青年がオーストリアの皇太子フェルディナンドを狙撃した事件がおきた。以前から独・奥・伊の三国同盟と英・仏・露の三国協商がヨーロッパの勢力均衡を保ってきたが、当時ドイツはオーストリアを合併する意志を持っており、好機を失うなかれと思い、オーストリアをして宣戦布告をさせると共に、同盟国であるという口実でドイツが即時に出兵し、東ではポーランドを通してロシアに侵入して乗勝長駆し、西ではフランスに侵入する途中で中立国であるベルギーを経由しようとしたのだが、予想外にアントワープで莫大な損害を受け、さらに出兵しないだろうと確信していたイギリスが出兵し、一層苦戦を強いられた。しかしベルダンを通りパリへ向かおうとしていた時に、アメリカ合衆国が出兵してヨーロッパに上陸したのは、実に青天の霹靂だった。ヴィルヘルム二世の夢は消えて終幕を告げた。これが第一次世界大戦だった。

数年かけて世界の耳目を集めた大戦争が終わり、1918年7月国際連盟がパリのベルサイユ宮殿で講和会議を開催した。米国の歴代大統領がヨーロッパに旅行したことの無いその前例を打破し、当時の米国大統領ウィルソン氏が自ら講和会議に出席し、有名な十四か条の原則を発表し、全世界を驚かせたことは今さら言うまでもないが、特に我々には非常に大きな関心を持ったことは、言うまでもなく民族自決の原則であった。⁽¹⁾

②⑩ 二・八独立宣言

この原則が報道されると韓国人は老若男女を問わず五条約〔第二次日韓協約〕七条約〔第三次日韓協約〕をはじめとした統監政治ないし総督政治の下で、口があっても言えず、耳があっても聞けず、筆があっても書けない状況で、我々には民族自決の原則が実現できないのか。どうすればこの原則が我々にも適用され、独立国家の自由民族として、これまで受けてきた蔑視から免れることができるのか。互いに信頼できる人が静かな席で会えばため息混じりにひそひそと話した。東京にいる学生達は学ぶために外国に来ているので比較的に自由な立場で密偵を避けながら討論もし、また方法論も話し合っていた。

その年の12月のある日、白寛洙氏が来訪し、談話の最後に「独立運動を起こすために学生の間で実践にうつすことを決定し、今準備中なのだが、その後の收拾のために、君は知らないことにして青年会の謄写版を使わせて欲しい」と頼んだので、これを許可して別れた。私の思い込みかもしれないが、時が経つにつれて学生達が一般的に緊張し、沈鬱になっているようだった。あ

とで聞いたことだが、宋繼白くんを本国に送り、宋鎮禹、元相允の両氏を訪問した際、「東京にいる学生達が2月8日に独立宣言をすることを決定し準備が整ったのだが、本国でも同じ時期に動くことでできないか」と尋ねると、「色々な準備があり、同じ時期にはじめることは出来ないが、実行することにはしているので、学生達が先にするのも良いだろう」と答え、財政的援助があったとのことだ。

1919年2月8日、学友会総会が東京市神田区西小川町二丁目五番地にある在日本朝鮮基督教青年会ホールで開催された。場内は立錐の余地もなくかつてない盛況だった。会長の白南奎氏が開会を宣言した後、議事の順序を変更するために徐椿、李琮根の両氏の演説があった後、会長が司会を辞退して尹昌錫氏が登壇し祈祷した後、白寛洙氏の独立宣言書と決議文朗読が終わり、力強い万歳の声が場内を震わせた時、監視に来ていた警察の検束が始まり、ここそこで椅子が飛び交い格闘が起きた。その中でも目についたのは、「こいつをつかまえろ、そいつを検束しろ」とあちこち動き回る密偵・鮮干甲の姿だった。白い雪がこんこんと降る夜だった。多くの学生と私も靴も履かせてもらえず裸足のまま西神田警察署に連行されると、二十余名が来ていた。これが東京の朝鮮留学生による2・8独立宣言だった。

独立宣言書

(略・資料1参照)

②出版法違反

西神田警察署に拘束された学生のうち、四、五名と私はその晩に釈放されたが、残り約二十名は日比谷警察署へ移されて行った。数日後、署名した九人(李光洙、崔謹愚の両人は二月初旬に上海へ行った)を市谷監獄へ移し、他の学生達は全員釈放された。私は寝具と差し入れを持って送ろうと青年会館を本部としてその基金募集に全力を尽くした。学生達は各々自分の募金を持参したのだが、この時本国から所謂自治運動をするという七人団が東京に来た。ある日その代表である朴、李の二人が私を訪ね二百円を寄付すると申し出たが、私は「あなた方の厚意に感謝しますが、その九人は独立運動をして収監中なので、あなた方の寄付を喜ばないと思います。大変申し訳ないですが、私としてはこれを受け取ることは出来ません」と言って謝絶した。一方、本国からは金周演氏(金度演博士の伯兄)が三十円を、宋繼殷氏(宋繼白君の伯兄)が二十円を寄贈して下さったことに対しては実に申し訳なく、また感謝であった。

先に記録したように九人が収監されて裁判があったので、弁護人を斡旋しなければならなかった。当時、青年会理事をしていた日本人のうち法学博士・農学博士の新渡戸稲造氏がいたので、多少の便宜をはかってもらえだろうと思い訪問したのだが、面会を断られた。その時は憤りを感じ

じた。彼もまた日本人であるから仕方がないと思いつつも、やはり偏狭な人物だと思った。私たちは故郷ではない東京の学生社会にあって、青年会も財政が逼迫していて適当な決断をすることができずにいた。我々の活動に理解のない人士には依頼することが難しいので、平素からよく知っている東京帝国大学学生青年会幹事の藤田進男氏を訪問し相談すると、今井嘉幸⁽²⁾、作間耕造の両氏を紹介してもらい、訪ねたところ、両氏に弁護を快諾していただき、感謝して帰ってきた。しかし、この二人の他にもう少し権威のある者はいないかと考えて、数年前の百五人事件⁽³⁾で名声がある花井卓蔵⁽⁴⁾博士を訪問した。我々の事情を話して弁護を請うと、その場ですぐに快諾し、百五人事件で弁護したことを概説した後、壁にかかっている四律一首を指し示し「これは百五人の中の一人、呉熙源氏が出獄後に有難うと言って送ってきた自作自筆の詩なんだ」と自慢げに話した。これに勇気を得た私は謝意を表して別れた後、すぐに法曹界の権威である鵜澤總明⁽⁵⁾博士を訪ね、来意を話すと、彼もまたその場ですぐに快諾して下さり、実に感激した。布施辰治⁽⁶⁾弁護士が自ら進んで弁護をしようと申し出て来たのだが、氏は社会主義の色彩を持つ人だということで多少躊躇したのだが、我々のために弁護してくれるという好意に感謝して受諾した。

裁判は2月20日頃にはじまり、署名した九人は勿論、数十名の学生の証人審問があったのだが、私もその中の一人だった。5月になり検事の論告があったのだが、出版法違反で禁錮二年の求刑であり、弁護人達の無罪弁論があった後、6月10日頃に禁錮九ヶ月の言い渡しがあった。控訴するか服役するか話し合わせ、控訴することも一つの抗争なので提訴しようという意見もあったが、結局無罪となる可能性はないので一日でも早く出獄する方が良いという意見を採用し、服役することを決定した。⁽⁷⁾

②出獄

裁判が終結した後、無報酬で九人のために弁護をしてくれた方々に謝意を表するために上野精養軒に五氏を招待したところ、多忙な中時間を捻出して全員出席し、学生側も十余名出席し、これまでの厚意に感謝すると共に、一夕懇談する機会を持てたことは本当に意味のあることだった。

裁判が確定し、今までのように食事の差し入れが出来なくなった。面会も極めて制限され、特別な事情がない限り一月一回程度だったのだが、これは私が担当していて毎月一回九人と面会することにした。それだけではなく、書籍や衣類の差し入れ、その他九人に関することはほとんど私が担当することになった。そうして監獄へ行く機会が多くなり、看守とも面識ができ、私に会うと「ここがお前の客間か？」という冗談まで出るようになった。

12月になり、面会に行った時に野口典獄を訪問した。「12月25日はクリスマスなのだが、九人はみな信者なので、彼らと一箇所で祈祷をしたいのだが許可をしてくれないか」と要請したのだが、「祈祷は日本語でして他の言語では話さないことと、看守部長一人を同席させれば、許可

してもよい」とのことで、そのように合議した。25日になり監獄へ行くと、看守部長が私を案内し教誨室へ入った。しばらくして一人ずつ9人が来室し、目視で挨拶を交わした後、私が来意を話した。すなわち、今日はクリスマスだが私たちがみな信者なので、一箇所での祈禱をすることを要請したところ、野口典獄が特別に許諾して、この機会を与えてくださったことを感謝するということ、また日本語で祈禱し他の言語では話さないことを約束したことなどだった。皆で頭を垂れ日本語で祈禱すると、九人も私も皆泣いた。終了後、涙にぬれた目で挨拶を交わして別れた。

翌年3月9日は九人が出獄する日だった。この日の早朝に二、三人の学生と共に市谷監獄へ行き典獄と会い、これまでの厚情を感謝した。門前で出獄する九人と会い、青年会へ帰ると、多くの学生が来会し互いに再会を喜んだ。しばらくの間互いに涙をにじませ挨拶を交わし、その後各宿所へと帰って行った。

<訳注>

- (1) 正しくは1918年1月に「平和のための十四か条」発表、1919年1月からパリ講和会議開催、同年6月ヴェルサイユ条約締結、1922年国際連盟成立の順番である。
- (2) 今井嘉幸（1878～1951）弁護士、衆議院議員、普通選挙運動家。
- (3) 百五人事件は韓国併合期の寺内総督暗殺未遂容疑事件。122人が起訴され、105人に懲役刑を言い渡したが、控訴審では99名が無罪となった。
- (4) 花井卓蔵（1868～1931）人権派弁護士として足尾銅山鉱毒事件や大逆事件など多くの重大事件の弁護を担当。
- (5) 鵜澤總明（1872～1955）弁護士・政治家。第一東京弁護士会会長、明治大学総長などを歴任。
- (6) 布施辰治（1880～1953）弁護士・社会運動家。『布施辰治と朝鮮』（総和社、2008年）参照のこと。
- (7) 2・8独立宣言に対する実際の裁判日程は、2月10日起訴、2月15日第一審判決、3月21日控訴審判決、6月26日上告審判決だった。（内務省警保局保安課『朝鮮人概況』より）

<資料3解説>

1919年2月8日に在日本朝鮮基督教青年会ホールで開かれた独立宣言集会が開かれた。この時に逮捕された留学生達の支援活動の中心となったのが、在日本朝鮮基督教青年会総務の白南薫（1885～1967）であった。白南薫は1909年に日本に渡り、明治学院普通学部2年に編入した。彼の支援者だった金鴻亮が安岳事件で逮捕されてからは、宣教師ホフソンマーやオルトマンズの支援を受けながら苦学して通い、1913年に明治学院普通学部を、1917年に早稲田大学政治経済学部を卒業した。早稲田在学中に朝鮮留学生学友会の会長や在日本東京朝鮮基督教青年会の幹事として留学生運動を指導し、早稲田大学卒業後は東京朝鮮基督教青年会の総務に就任。



白南薫

1919年の2・8独立宣言では後方支援活動を担当した。白南薫は逮捕・起訴された学生代表9名のために、今井嘉幸、作間耕造、花井卓蔵、鶴澤總明、布施辰治の5名に弁護を依頼した。弁護団は厳しい内乱罪を適用しようとした検事の論告をことごとく論駁し、結局出版法違反で禁錮九ヶ月という微罪にとどめることができた。

1923年に帰国後、晋州一進学校（慶尚北道）、東萊日進学校（釜山）、協成実業学校（ソウル）・光新産業学校（ソウル）などの校長として民族教育に力をそそぎ、創始改名を最後まで拒否した教育者として知られている。

解放後は韓民党の創党幹部となり、1955年民主党最高委員、1963年新民党全党大会議長、1963年民政党最高委員などを歴任した。

<資料4> 金東仁「文壇十五年裏面史」より

「創造」⁽¹⁾ 創刊号

1919年正月。

創刊号の編集が終わった。幸い200円という金も家から送ってくれて、まず振替口座を用意して本社は金煥君の下宿に置き、事務的なことは金煥君にまかせることにした。

そんなある日の朝、まだぐっすり寝ていたのだが、女中が上がってきて来客を知らせた。

私に朝訪ねてくるような客がいるおぼえはなかったが、とにかくお入りくださいと言うと、見知らぬ人が一人入ってきて名刺を渡された。見ると若松署の刑事だった。何の御用ですかと聞くと、ちょっと警察署まで来てほしいとのことだった。わけがわからなかったが、行こうというので若松署まで行った。

行ってみると、何も説明されずに留置所に入れられた。どういうことなのか訳がわからなかった。雪がこんこんと降る日だった。明かり取り窓からはボタン雪が見えた。それを見上げながら私はしょっちゅう時計を取り出して見ていた。

昼食の時には洋食定食を頼んでくれた。しかし呼び出されることもなく、無言だった。

午後1時頃、留置所の外から人の声が聞こえたので見てみると、見知らぬ朝鮮人女性が一人連行されて来た。彼女が朝鮮服を着ていたので朝鮮人だとわかったのだが、彼女は私が誰かわからないようだった。後でわかったことだが、愛国婦人会事件⁽²⁾で逮捕された某嬢だった。

5時頃になって、ようやく署長室へ呼ばれた。

「金東仁氏で間違いありませんね。」

「はい」

「いまから聞くことについて正直に答えてください。金くんは礼儀正しい人物だと知っているのです、丁重にもてなすから」

何のことだか見当はついた。留学生の間ではすでにいろいろなことが噂されていた。私もそのような会議に偶然二度参席したことはあったが、何かの同盟を結んだりしたことはなかった。しかし時が時だけに嫌疑がかかったのだ。

「わからないです。知っていたらお話しするのですが」

「金くん、すこし前に実家から金200円を持ってきたことがあったらう？」

「はい」

「その資金は何に使うために持ってきたんだ？」

資金の用途が明白な以上、もちろんその日に無事に出ることができた。

警察署を出てから知ったのだが、その日留学生青年会館で小さくない事件が起き、崔八鏞、徐

椿、金度演その他数氏が捕まえられたとのことだった。⁽³⁾「創造」創刊号はそのような日に世に出た。京都留学生雑誌「学友」もその前後に世に出た。

余の検束

2日後からはこの平凡で温かな私の右に当局の監視がつきはじめた。その日の朝に私を若松署へ連行した刑事がいろいろな口実をつくっては時々やって来て1・2時間ずつあれこれと言って来たのだった。

金200円の用途に対する説明もされ、監視がつく事情もないのだが、このように監視がつくのはいまでも私の奇異に思うことだ。

そのような間に春園も「創造」の同人に参加することになった。東京に一時いたが上海へ亡命している間に、以前から春園と親しかった田くんが参加を誘ったのだった。

「創造」第2号の編集が終わった。その第2号に掲載された田くん⁽⁴⁾の「天痴？天才？」という短編は私が今も愛読している小説で、朝鮮小説史上特筆できる佳作だ。

ある日⁽⁵⁾朝鮮留学生大会が日比谷公園音楽堂で開かれた。私もこれに参席した。まず李達が講壇に立った。しかし発言をする前に禁止され解散命令が出された。

そこで小さな衝突が起こった。解散させようとする警官と解散させまいとする学生たちとの間にこぜり合いが起きた。そして最後には検束される者まで出る事件となった。

私はいちばん後ろに立ってこの様子を見ていた。ところが何者かが来て不意に私の両肩をつかんだ。見ると巡査だった。

「こっちこい」文句も言わずに引っぱられて言った。約20名が巡査10名に包囲され日比谷警察署まで連れて行かれた。その晩私は生まれて初めて警察署の留置所で寝た。誰かは分からないがある朝鮮学生が差し入れてくれた毛布で体をくるみ、あれこれと思いめぐらしながら、私はその晩一睡もできなかった。

捕まった数十名の学生の中で警察署で夜をすごした人は私と李達の2人だけだった。私は何の咎で夜まで警察署に送られたのか今も分からない。私の顔が犯罪者のように見えたのか、またはその時の警官の解散命令に反抗した学生と私の外見が似ていたので間違えられたのか…

翌日の新聞には金東仁(25)、李達(26)両君が不穏な行動をしたため検束されたと報道された。下宿に帰ると、下宿の大家から別の下宿を探して出て行ってくれと要求された。

このような中で「創造」第二号は横浜の福音印刷組合⁽⁶⁾で活字を拾う作業を急いでいた。

帰郷

1919年3月5日

「ハハキトク スグカエレ。アニ」

という電報を受け取った日の夜、私は大急ぎで一高寮の耀翰⁽⁷⁾を訪ねた。そして私が帰国したあとのことを依頼した。

半信半疑ではあった。日本の各新聞に金東仁が検束されたという報道が出たので、嘘をついても家に連れ戻そうとしているのではないかとも思った。しかしこのような電報をもらって、何もせずに一人でいるわけにもいかなかった。

次の日、あわただしく荷物をまとめて私は帰国の途についた。

釜山に上陸すると私は厳重な警戒に驚いた。左右の5歩に一名ずつ刑事と思われる人がずらりと並んでいた。

私はそのものものしい警戒にまず恐怖をおぼえた。もちろん何も気にすることはなかったのだが、あまりにもものものしかったので胸がぞくとしたのだった。

<訳注>

- (1) 『創造』は朝鮮で最初とされる文芸同人誌。金東仁、田栄沢、朱耀翰、金煥が最初の同人であり、後に李光洙、崔承萬、呉天錫、金觀鎬、金億なども加わる。創刊号は1919年2月1日に発行された。
- (2) 2・8独立運動及び3・1独立運動に参加した金瑪利亞と黄愛施徳が、大韓民国愛国婦人会を結成。大韓民国臨時政府に募金を送ったことが日本当局に発覚し、逮捕された。
- (3) 金東仁評論全集の編集者である金治弘氏によると、2・8宣言についての記述のあとに数行が削除された形跡があるという。検閲で削除された可能性がある。
- (4) 田栄沢（1894～1968）小説家。牧師。『創造』創刊時は青山学院神学部に通っていた。
- (5) 1919年2月12日。
- (6) 福音印刷は1898年に村岡平吉が設立したキリスト教系出版の印刷製本会社。村岡平吉は村岡花子の義父で、1883年に受洗、1890年には横浜指路教会の長老となった。
- (7) 朱耀翰。当時は東京第一高等学校の学生であった。朱耀翰の詳細は<資料6解説>を参照のこと。

<資料5> 金東仁「文壇三十年の足跡」より

第二号の原稿が印刷所に渡る時、創刊号の見本が先に来た。そして二月八日、その一千部が横浜から東京に鉄道で届くことになった。前日の七日は興奮して、早く明日が来るのを待ちながら床についた。

八日は二つのことがあった。一つはもちろん横浜から本社（金煥の下宿）に到着する雑誌を見に本社に行くことであり、もう一つはこの日に留学生の集会在青年会館で開かれるのでそこに行くことであった。こうして八日は早起きして早飯を催促し、それを食べてすぐに出かけたのだが、左手がつかまえられた。

慇懃に渡された名刺を見ると、若松警察署の巡査だった。

雪がしんしんと降る早朝の道を巡査と同伴して若松警察署へ行った。

その日、朝鮮人女性も一人若松警察署に呼ばれ取調べを受けていた。金マリアか黄愛徳、あるいは黄信徳か、朝鮮学生集会で時々見た顔だった。

その女性は何の取調べを受けたかわからないが、私は要するに『創造』創刊費用として送金してもらった二百円の使い道を取り調べられた。学生の新聞を作るための大金なのか、何に使ったのかを尋問された。

雑誌の創刊費用として使ったということが確実に判明したので、一日で無事に釈放された。警察署から無事に出て、青山の本社へ行き、そこで初めて留学生独立宣言発表の顛末を聞いた。

東京留学生と日本警察の闘争の幕がついに開かれたのだ。それから留学生たちは青年会館や日比谷公園に集合し日本警察に対して連日のように闘争をした。

ある日、日比谷公園で集会をしたのだが警察に解散させられ、何人かは警視庁に引致されたのだが、他の十数人の学生はすぐに釈放され、私と李達という学生が一晩拘束された。

その事件が大阪朝日新聞と東京日日新聞に報道され、家族はとても驚いて「ハハキトクスグカエレ」という電報を私に打った。

その電報が嘘であることを知る由もない私は、とても驚き、朱耀翰を訪ねて『創造』の引継ぎを頼み、その日の晩の汽車で東京を発った。三月一日のことだった。汽車が大阪を過ぎた時に新聞を買って読むと、朝鮮では何か事件が勃発しているようだった。

しかし大きな事件だとはわからなかった。その間の十年にわたる寺内〔正毅〕と長谷川〔好道〕の武断統治下では、何か大きな事件が起きるということは想像もできなかった。東京でもその間、一度に数百人が集まってひそひそと話しているだけでも解散させられたので、そのような事件があったのではと推測された。

下関からの連絡船に乗船する時と釜山での下船時に警戒が強いことは感じたが、三・一のような大きく雄大で爽快な事件が勃発したようには思えなかった。

汽車の中でようやく事件の輪郭が見えてきた。そればかりでなく、以前なら日本人の汽車事務車掌におどおど震えていたであろう田舎の老人が汽車事務車掌に何か声をかけている光景を見て、「ああ、民族は生きていたのだな。寺内の銃口でも民族の魂は殺すことが出来なかったのだな！」

と、つい涙がこぼれた。

汽車がソウルを通り、王の葬儀を見物し三・一を経験して帰って行く人たちから比較的正確に三・一の雄大なメロディーを聞くことが出来た。

汽車で聞いた感激のニュースに陶醉しながら平壤に到着し、家に帰った。

私は十五歳までの少年期を平壤で過ごしたが、親友のいない人間だ。もともと交際的でない上に「悪い子と付き合いはいけません」という教育方針の下で育ったので、小学校の同窓生はいるのだが互いの家を行き来するほどの親交はなかった。

三・一の国民自粛によって街も寂しく親友もおらず、家で本を読むことぐらいしかなかった。

その時に私の弟が友達と謄写版で檄文を刷って毎晩市内に貼りに行っていたのだが、その檄文の原稿を一つ起草してくれというので書いてやったら、そのために三月二十六日に警察に捕まってしまった。警察と監獄でちょうど三ヶ月過ごし、六月二十六日「懲役六ヶ月、執行猶予二年」という判決をうけ、再び娑婆に出てみると、印刷所に渡しておいたままその後関わる事が出来なかった『創造』第二号は、もちろん印刷はされていたが、激変の世相がどうなるか予測することが出来ず、本社に行ってみると、本社には金煥一人が留宿していた。田栄沢も帰国しており、朱耀翰も帰国し、私の妻と協力して何か檄文を一つ書いて、耀翰は上海へ亡命していた。まさに立ち上がろうとしていた朝鮮新文学は三・一運動に直面して行き詰ってしまった。

文学運動は三・一運動に直面して同人は四方に散らばり行き詰ってしまったが、市民生活は三・一以前へ復帰して、嫁入りするものは嫁入りし、婿入りするものは婿入りし、再び平穏な現状に戻った。

日本政府は朝鮮の三・一事件は結局寺内総督の武断統治に対する反抗であるとして、海軍大将の齋藤実を朝鮮総督に送り、朝鮮は文化統治に変えるということを宣布した。

この齋藤実の文化政治の船に便乗し朝鮮でも何冊かの雑誌と民間新聞が発刊された。そして出版を目標にする会社も生まれた。

<資料4・5解説>

金東仁（1900～1951）は小説家。1900年平壤の大地主で、長老派教会の長老である金大潤の次男として生まれる。1912年に崇徳小学校を卒業。朱耀翰とは同級生であった。1914年に渡日し、東京学院に通うが、東京学院の閉鎖のため1915年明治学院中学部2年に編入。朱耀翰の影響で文学に興味を持つようになり、3年生の回覧雑誌に初めて小説を日本語で書く。中学部を中退して美術を学ぼうとするが、挫折。1919年に朝鮮最初の文芸同人誌である『創造』を東京で発刊。帰国後、3・1独立の檄文を書き出版法違反で逮捕、6ヶ月間投獄された。

1919年に発表した初短編小説「弱き者の悲しみ」は朝鮮最初の自然主義作品として知られている。主な代表作は「いも」「足の指が似ている」「明文」「赤い山」「狂炎ソナタ」などがある。没後、彼の文学的業績を称えて1955年に「東仁文学賞」が制定された。韓国文学界において最も優れた作家に授与される、権威ある文学賞である。



資料4の「文壇十五年裏面史」は朝鮮日報の1934年3月31日から4月6日まで6回にわけて連載されたものである。注（3）に書いたが、2・8宣言についての記述のあと数行が削除された形跡があり、検閲で削除された可能性がある。日本統治下の朝鮮の新聞に掲載された記事であるため、あまり具体的に書くことのできなかった事情も推察できる。

資料5の「文壇三十年の足跡」は雑誌『新天地』1948年3月号から1949年8月号にかけて連載されたものである。植民地支配からの解放後に書かれた文章であるため、資料4よりも具体的に書かれている。両資料を比較しながら読むと興味深いと思い、2つの資料を紹介した。

<資料6> 資料6：朱耀翰の自伝『20世紀生まれ』より

上海へ

「三・一運動」がぼつ発したため、その間準備して置いた「創造」第二号は、鎮南浦出身の金煥が原稿をソウルに持ち帰って発行した。

挙族的な「三・一運動」が無残に弾圧され、知っている人であると知らない人であるとを問わず、やたらと警察や憲兵に引っ張られる情景に、憤怒、悲哀、虚脱、葛藤をおぼえた私は、はつきりした目当てもなしに、編集後記に「私は行く。どこへ行くかはわからない。しかし、どこへか、私は行くだろう」と、勇ましいところを見せた。しかし、毎月毎月の学費を親からの仕送りでもまかなっている学生の上で、いったいどこへ行けるだろうか。平壤行きの切符を切った。三月十日ごろのことであった。ソウルでいったん降りて知り合いの人に会ったところ、「話にならないんだ、みんなつかまってしまった」という。当時、抑圧された憤怒は、日帝とともに李完用⁽¹⁾、宋秉畯ら合邦の立役者どもに向けられた。公衆便所の落書のほとんどは、この二人に対する悪口であった。私の入った公衆便所には、悪口雑言とともに「李完用の別荘」というのがあった。

金東仁と弟の煥燮が先に帰省していた。煥燮は「無窮花少年会」というものを組織、謄写版刷りを毎戸に配っていた。

その中に、「民族自決を主張するウィルソンアメリカ大統領が来る」というのがあったので、「そんな根も葉もないことを書いたら、それが事実でないことがわかった時、かえって逆効果を招きかねない」と諭したことが思い出される。日本は第一次世界大戦に勝った連合国だった。ウィルソンが民族自決を主張したとはいえ、同じ連合国である日本に「朝鮮を独立させろ」とは言わないだろう、ということくらいは知っていたのである。

煥燮と無窮花少年会員たちは、私が帰省した十日ほど後に、全員逮捕された。煥燮は一年の懲役を受けた。煥燮がつかまったのち、中村という巡査が毎日のようにやって来て、「学校にもどれ」と言う。監視を兼ねて恩に着せようとしたのだろう。

煥燮の逮捕にショックを受けた父も、「せめておまえ一人だけでも、まともに勉強をつづけろ」と諭すので、私は東京に舞いもどった。

東京にもどりはしたものの、勉強は全然手につかなかった。ある日、青年会館に立ち寄ったところ、総務の崔承萬⁽²⁾がサンフランシスコで発行される「新韓日報」を見せてくれた。「上海で臨時政府が樹立された」という記事が目についた。この記事を読んだ瞬間、私の心は決まった。崔承萬も「ぜひそうしろ」と、積極的に参加してくれた。

上海には、玄正柱⁽³⁾が先に行っているのも力になった。玄正柱の父君は、旧韓国の外交官としてペテルスブルク（今のレニングラード）に在勤中、上海に行っていたのである。

父には手紙で事後了解を得るつもりで、上海行きの切符を切ったのが、五月中旬であった。鉄道便で神戸まで行き、日本郵船の船に乗った。しかし、船が門司に寄港した時、警察につかまって下船した。何も私が大がかりな独立運動をやって指名手配されたわけではなかったが、上海行きの船に、しかも夏休みでもないのに朝鮮人の学生が乗り込んでいたので、不審質問をしたのだろう。

「私に何の罪があるというのか。もう船が出るところだから行かせてくれ」と抗議したが、警官は「照会をしなければならない」といって釈放してくれなかった。船が出発してしまってから、ようやく「今晚は旅館に泊まって、明日東京に帰れ」と釈放してくれた。

旅館の主に船の切符を見せて五円を握らせ、「何とか方法がないだろうか」と相談してみた。五円のクスリが、効いたのか、主は「今夜、急行で長崎に行き、私の紹介する旅館を訪ねれば船に乗れるはず」と言う。

長崎行きの急行に乗ったら、今度は列車ボーイがやって来てあなたに会いたいという人がいるというので、ついて行ったところ、福岡県学務部長という人が「学校にもどれ」と言う。「もう一ヵ月以上も休んだから、いまさら学校にはもどれない」と答えたところ、「一高という素晴らしい学校を途中でやめるなんて、バカもいい加減にしろ。校長が私の同窓だから、私が復校の責任を持ってやる。さあ、早くもどれ」と、繰り返し繰り返し勧誘する。

「ありがとうございます。しかし、どうせかなり長い間休んでしまったし、無理して切符も買ったことだから、いったん上海まで行って、来年の新学期からやり直したいと思います。休学の手続きを引き受けてくださいますか」おそらく、こういうやり取りで片がついたと記憶している。

翌日、長崎の旅館を訪ねて五円をやったら、言うとおりにすればよい、ということだった。「小舟で船に乗せてやるから、あなたの荷物のあるところで壁に向かって寝ていなさい。船が港を出るまでは、そうしていなさい。もし船が違うと言われたら、『同じ日本郵船の船じゃないか』と突っぱねなさい。いったん港を出た船は絶対にもどりませんから……」ということだった。

こうして、私は密航ならぬ密航で日本を脱出した。夕日に映える長崎の港が、この上なく美しかった。

上海臨時政府

上海に着いたのは五月の中旬、だから、「三・一運動」のぼつ発した日からほぼ二ヵ月半が過ぎたころであった。

広大な揚子江の悠々たる流れ、林のようにそびえた高層ビル、数え切れないほどの人力車の洪水——そのいずれも、私の精神的視野を広めてくれるかのようであった。

一方、そのころ中国でも、「五・四運動」という文化革命運動が北京大学を中心に起こって全

国に広がり、同時に、排日運動も広がりつつあった。

私は、日本で着ていた学生服をそのまま着ていたが、「早く背広に着替えないと、日本人と見られてなぐられるかもしれんぞ」と友人たちが忠告してくれた。

服を着替えるのは問題なかったが、坊主刈りにしていた髪を伸ばすためには、かなり長い間イガ栗頭で通さなければならなかったもので、ずいぶん冷やかされたものである。

中国の「五・四運動」が、わが国の「三・一運動」の影響によるものであることは、ほぼ間違いないと思われた。翌年（一九二〇年）、インドのガンジーがはじめた排英運動、すなわち「サティア・グラハ」という真理把持運動も、わが国の独立運動に刺激されたものではなかったかと思う。その運動の行動綱領の一つである非暴力、非協力の原則は、わが国の独立宣言書の末尾にある非暴力原則と合致している。

つまり、「三・一運動」は、全アジアの民族運動の先駆者だったのである。

はるか時代が下がって、一九六〇年の四・一九学生決起で李承晩政府が倒れた翌年、トルコで学生運動が起こって腐敗政権を倒したのも、決して偶然なことではないと思っている。

玄正柱くんの道案内でフランス租界に行って、同胞青年たちの活動ぶりを見た。白南七という青年がリーダーになって、英文で独立運動消息を刷り、外国の通信社あてに発送したり、「われわれの消息」という謄写版刷りの新聞も発行していた。

私は、「創造」の編集をやったという経歴から、「われわれの消息」の編集を任せられ、それが縁で、やがて「独立」という臨時政府機関紙（週刊）の編集にもたずさわることになったのである。

ある日、それら青年たちが、中国人学校の「南陽大学」と野球の親善試合をやるというので見物に行き、そこで、春園・李光洙先生と初めて顔を合わせた。

春園の初印象は、目玉が黄色く、肌色が白く、顔も体つきも大きいので、白人との混血児ではないかと思われるほどだった。

試合が終わったのち、茶集會が開かれたが、わが方を代表して春園が英語で演説をやった。英語の実力にも驚いたが、その内容にはもっと感嘆した。

「今日、われわれは白いボールを投げ合ったが、将来は、われわれ両国の青年たちが力を合わせて、日本に向けて銃弾を投げることになるだろう」というもので、拍手喝采を受けた。

五月中旬ごろ、島山・安昌浩⁽⁴⁾先生が米国から上海に到着した。

北京路という通りにある中国人礼拝堂を借りて、島山先生の最初の演説会が開かれたが、元来が雄弁家として名高い島山先生だったから、当時上海にいた同胞のほとんど全員が集まった。

噂のとおり、彼の演説は満場の聴衆を興奮させ、深い感銘を与えた。「聞け、大韓の男子たちよ、大韓の女子たちよ！きみたちは今日、大韓のために何をやっているのか——」

という切り出しで、静かな、それでいて胸に響く声の、派手なゼスチュアも使わない彼の演説は、まるでチェロを奏でるように聴衆を魅了した。

私は年二十にして初めての感激であった。島山はすでに十年も前から演説のうまい青年として本国でも有名だったが、そのころ、私はまだ十になったばかりの少年だったから、彼の演説を直接聞いたことがなかったのである。

これより先、上海で発表された「大韓民国臨時政府」閣僚名簿には、國務總理李承晩、内務総長安昌浩、財務総長李始栄、法務総長申奎植、臨時議政院長李東寧らが名を連ねていた。しかし、李承晩総理はアメリカにいたので、安昌浩が内務総長として國務總理の職権を代行しながら、海外独立運動の総指揮を取るものと期待されていた。

上海に集まっていた志士と若い青年たちは、今や海外で組織された独立運動が活発に推進されるだろうと確信し、勇気百倍したのであった。

しかし、島山は内務総長就任を頑として拒んだ。その理由は、当時、臨時政府の名簿が少なくとも三つが発表されていたからである。すなわち、上海臨時政府のほかにも、北満とシベリアにいた志士たちは「国民議会」を組織して内閣名簿を公表し、ソウルでも十三道の代表が極秘のうちに会合して「漢城政府」というものを組織していたのである。

これら三つの政府を組織した人たちが一堂に会して、統一した臨時政府を樹立する前に、自分が「上海政府」の閣員として就任するということは、かえって紛争の火種を播き、「統一」を不可能にする恐れがある、というのであった。

上海の追憶

本国の津々浦々で独立万歳を叫び、日本警察の手を避けて上海に集まってくる青年の数は、日増しに増えていった。

鴨緑江の対岸、安東県の英国人ショー氏の経営する「二隆洋行」という商店が、連絡事務所兼隠れ場所になっていた。アイルランド出身で、韓国に同情しているショー氏は、自己所有の船を無料で提供、韓国の青年たちを上海まで運んでくれた。その他の青年たちは、西海岸の小さな港から中国人のジャンクに乗って脱出したりした。

本国の愛国婦人たちがわれ先にと抜いて献納した金の簪と指輪をたずさえて来て、臨時政府に伝達する人もいた。

これら亡命客と青年たちの世論は、島山の内務総長就任を強要した。「統一」計画は、内務総長の資格で推進する方がより効果的ではないか、という世論の圧力に抗し切れず、島山もとうとう就任を承諾し、米州の国民会が募金して送ってくれた資金でフランス租界に家を借り、「政府」の看板を掲げ、各部次長の任命と國務院秘書室の設置を終えて、いよいよ「政務」に着手したのは、五月末ごろのことであったと記憶している。

上海の南方、杭州地方に滞留していた李東寧、李始栄、申奎植ら元老にも人を遣わして上海に迎え、それぞれ閣員として就任するようにし、独立運動に関する「歴史編纂会」も設置するほか、

「独立運動方略」の起草を推進した。

「青年団」「愛国婦人会」「大韓赤十字」なども誕生した。「連通制」という機関を設立して本国に密使を派遣、情報交換、地下運動の支援、資金調達などの任務を組織化した。

最も急を要する「統一」事業を推進するため昔の「新民会」の同士である安泰国氏を満州から呼び寄せ、特使として「国民議会」に派遣しようとしたが、不幸にも安氏は腸チフスで急死した。

それより先、島山は「禁煙」を宣言したことがあるが、安氏に先立たれた悲しみに耐え切れず、旅館に休みに行く時、私も随行したが、島山はボーイにたばこを持って来させ、五十本入りの両切りたばこ一缶を一晩のうちにすっかり空にしたのを目撃したこともあった。

「統一」事業はその後もつづけられた結果、ついに「国民議会」の閣員として統一することに合意し、「臨時議政院」を召集して内閣改造に成功した。

ところが、「国民議会」が突然「法統論」を持ち出して、かえって紛糾が大きくなってしまった。「国民議会」の主張は、上海の「臨時議政院」が内閣を改造したのは過ちであり、「上海内閣」を取り消して「国民議会」の内閣を承認、法統を正せ、というものであった。

青年たちは、このような封建的法統論に反発し、年寄りたちの展開する「承認」「改造」の喧嘩が果てしなくつづくのに大いに失望した。二十の若僧であった私も、心よからず思っていた。

そのような泥試合が、われわれ若い層の胸に、初めて海外独立運動の前進に対する憂慮と失望を植え付けたのは事実である。

「われわれの消息」という謄写版刷り新聞が、「独立」という週刊誌に発展したのは、同年の八月のことであった。李光洙氏が社長、私が編集記者に任命されたが、中国人の印刷所には漢字の活字はあっても、ハングルの活字は求めることができなかった。

一人の亡命客が持っていた四号活字のハングル版バイブルをばらして、文字を拾って写真版にし、さらにそれで字母をつくった。

私は、外回りの取材記者、編集記者、校正記者といった一人三役を兼ね、趙某⁽⁵⁾という人と一緒に、中国人印刷所で創刊号を出したのが八月末のひどく蒸しかえす明け方の三時であった。こうして、タブロイド版四ページの臨時政府機関紙が誕生したのである。

趙氏と私は、この世にも珍しい新聞を手にして印刷所を飛び出し、同胞の金氏の経営する洋菓店でアイスクリームで祝杯を上げた記憶が、今でも鮮やかに目の前に映ってくる。

この新聞を発行していたおよそ一年間、私は、春園先生と文選室の裏部屋で同じベッドを使い、くつの底に穴があいて雨水が入ってくるのに、それを修繕する金がないので、そのままはきとおしたものである。

春園がカバンの中から婦人用の寝間着を出して見せながら、それが愛人の許英肅さん（後の春園夫人）の寝間着だと教えてくれたのも、そのころのことであった。

大人たちの「政治遊び」には初めから目をかぶり、「独立新聞」が鴨緑江を越えて、ソウルは

いうに及ばず、遠く全羅道地方まで、「連通制」を通じて配布されているということに生きがいをおぼえながら、およそ一年間を、昼夜の区別なしに駆けずり回ったものである。

<注>

- (1) 李完用（1856～1926）政治家。大韓帝国の内閣総理大臣として1910年に韓国併合ニ関スル条約（日韓併合条約）を調印した。
- (2) 崔承萬（1897～1984）雑誌『創造』の同人。東京外国語学校ロシア語科で文学を学ぶ。1923年より東京朝鮮基督教青年会の第三代総務をつとめる。その後東亜日報社で雑誌編集に携わるが、1936年に日章旗抹消事件で雑誌『新東亜』が廃刊となり退社。
- (3) 玄正柱（1899～1970）明治学院中学部卒業後、上海の滬江大學で学ぶ。解放後は大韓サッカー協会会長などを歴任。
- (4) 島山・安昌浩（1878～1938）独立運動家。新民会、興志団、修養同友会などを結成。修養同友会には李光洙や朱耀翰も参加した。安昌浩の詳細は李光洙『至誠、天を動かす一大韓民国独立運動の父 島山安昌浩の思想と生涯』（具末謨訳、現代書林、1991年）参照のこと。
- (5) 趙某 趙東祐か？（資料2を参照のこと）

<資料6解説>

朱耀翰（1900～1979）は朝鮮で初めて近代的な自由詩を取り入れた詩人である。1900年平壤で生まれる。平壤の崇徳小学校を卒業し、1912年、在東京朝鮮人留学生宣教師だった父親（朱孔三）について渡日。1913年に明治学院中等部に入学。明治学院在学中に文学に関心をもち、『伴奏』『現代詩歌』『白金学報』らに日本語の詩を発表する一方、川路柳虹の門下で近代詩を学ぶ（朱耀翰の日本語作品は明治学院歴史資料館資料集第8集に収録）。また『白金学報』の編集委員や学生会にも参画した。この雑誌編集の経験が後の『創造』発刊につながってゆく。



1918年に明治学院中等部卒業後、東京第一高等学校へ進む。1919年2月、金東仁らと共に朝鮮最初の純文芸同人誌『創造』を発刊。その第一号に発表した詩「火祭り（観燈会）」が評価を受け文壇に出る。この詩は朝鮮で最初の自由詩であり浪漫詩であると言われている。

1919年の3・1独立運動後に上海に亡命。李光洙が社長兼主筆となった大韓民国臨時政府の機関紙『独立』（のちの『独立新聞』）の出版部長となる。1920年、安昌浩の指導する興土団に入団。上海の滬江大学卒業後に帰国し、東亜日報、朝鮮日報社の編集局長をつとめる。1924年には詩集『美しい暁』（朝鮮文壇社）が出版された。

1936年、興土団事件により逮捕・投獄される。その後、「松村紘一」と創氏改名し、1943年に朝鮮文人報国会支部会長となり、1945年には朝鮮言論報国会へ参加するなど、親日文筆活動を行う。

解放後、言論界・政界にも進出。国会議員を経て四・一九革命後の張勉内閣の復興部長官、商工部長官を歴任。五・一六軍事政変後は経済科学審議会委員、大韓海運公社社長となる。また、明治学院同窓会の韓国支部長として1967年に来日し、明治学院90周年記念式典に参加し、記念植樹もおこなっている。

本資料は、朱耀翰が日本語で書いた自伝の一部である。『アジア公論』1976年10月号から1977年2月号にかけて連載された。本資料集には、上海での李光洙との出会いと大韓民国臨時政府での働きなどについて書かれた部分を掲載した。

<資料7> 文一平起草「哀願書」

哀 願 書

朝鮮建国四千二百五十二年三月十二日

朝鮮民族代表 金百源 外十一名

去る三月一日朝鮮民族代表三十三名の朝鮮独立に対する宣言書は決して一個人の独断的片決より出でたるものにあらず実に全朝鮮民族の良心的要求なり。吾等はその後継者を以て二千万の要求二千万の主義を代表しその要求とその主義とを貫徹せんとす。吾等は昔日の朝鮮人にあらず世界の大勢を了解し文明の正道を円覚したる新朝鮮人なり。大勢は吾等を驅りこの要求の正大なるを保証し、文明は吾人を促しこの主義の光明なるを擔負す。故に朝鮮の独立は民族要求の正義人道にして大勢必然の公理天則なり。併合当初に在り世界に布告し朝鮮は武力実力なき故、他の外国の左右を受け東洋平和茲に攪乱する憂あるにより日本は朝鮮を併合し東洋平和を維持すると云いしも今日世界の大勢は武断の実力去り正義人道来りたるものにあらずや。既に圧迫的逆理去り平和的正道興りたりとせば今日吾等の独立宣言は何の矛盾あり何の背理あるか。東洋平和は朝鮮独立により益々確固たるにあらずや。之を隣邦支那に問い露国に問いまた世界に問うも誰か逆理逆道なりと云うや。吾等のこの挙を輕挙妄動とすべからず。吾等の背後には実に二千万の思想的源泉あり。吾等の主義と要求を後継すべく吾等は寸鉄の武力に依らずして正義人道の大經大法を以て何時までもその目的を貫徹せんとす。

<資料7解説>

文一平が起草した「哀願書」は、1919年3月12日に発表されたもので、「第2の3・1独立宣言」とも言われているものである。金百源と文一平の鍾路警察署での訊問調書（1919年3月14日）によると、文一平は3月8日の午後6時頃に安国洞にある長老派教会の牧師である金百源を訪問した。この時文一平は「三十三人が独立宣言を発表して勾禁されている。自分たちも二千万余の代表となりたい」と語ったという。二人は良心の命ずる所に従って三十三名の民族代表のした事に付き従って行くために行動をとることを話し合い、哀願書の文案を文一平が作成することになった。

そこで文一平は3月11日に哀願書を二通作成した。3月12日、瑞麟洞にある永興館という料理店に金百源・文一平・金極善・趙衡均・白觀亨・車相晋・文成鎬の7名が集まり、二通の哀願書のうち一通は朝鮮総督に提出し、一通は鍾路普信閣で朗読発表しようと決め、車相晋と文成鎬は朝鮮総督に提出、金百源・文一平・金極善・趙衡均・白觀亨は鍾路十字街にある普信閣前に行き群衆二・三百人の前で朗読しはじめたが、一枚ばかり読むとすぐ取り押さえられてしまったという。文一平は懲役八ヶ月となった。

文一平（1888～1939）は歴史学者・報道人・教育家。号は湖巖。1888年、平安北道の義州で生まれる。1905年に渡日。青山学院で聴講生をした後、太極学校で日本語を学び、明治学院普通学部3年に編入した。明治学院を卒業後、帰国して平壤の大成学校の教師となり、その後義州の養實学校、ソウルの徹新学校でも教えるが、1911年に再渡日して早稲田大学予科に入学し、翌年政治学部留学。1912年に大学を中退し、上海に渡って大共和報社に勤めた。1914年に帰国。1919年に3・1独立運動が起こると、「哀願書」を書いて普信閣で朗読。逮捕され、懲役八ヶ月となった。

その後、中東学校・松都高普・培材高普などで教鞭を取りながら、『朝鮮日報』『中外日報』『開闢』などに文章を発表。1933年には朝鮮日報編集顧問に就任し、6年間論説委員として筆を執る一方、歴史の研究を深めて民族主義的な立場で多くの論文を発表した。主な著書に『朝鮮史話』『韓米関係五十年史』『湖巖史話集』などがある。彼の死後遺稿を集めて 1939年に『湖巖全集』全3巻が出版された。



1995年、文一平の独立運動家としての功勞が認定され、建国勲章独立賞が追叙された。2003年5月には国家報勲処が選定する「今月の独立運動家」に選ばれ、2005年6月には独立記念館に彼の語録碑が建立された。ソウル郊外の忘憂里合同墓地にある文一平の墓地も整備され、「独立運動家の墓地散策コース」の一つになっていて、墓の入口にも彼の語録碑が建立されている。

独立記念館の文一平語録碑



＜日本語訳＞ 湖巖 文一平 先生
(1888～1939) 独立運動家 民族史学者
朝鮮独立は民族が要求する
正しい道として 大勢必然の
公理であり 鉄則である
哀願書中より